

# 適正施設ガイドライン

【ゼニタナゴ *Acheilognathus typus*】

2020年9月

公益社団法人日本動物園水族館協会

## 1 飼育環境

### 1-1 水温

成魚・未成魚は、屋内飼育の場合 5℃（冬季）～32℃（夏季）で飼育可能。ただし、水温 10℃未満になると食欲が減退し、行動が不活性になる。繁殖を行いたい場合には、低水温期 18℃未満と高水温期 25℃前後が必要。仔稚魚については、18℃～30℃で飼育できるが、27℃前後の方が成長が良い。屋内飼育で水温管理が適切に管理できない場合、ヒーターやクーラーの設置が必要である。（ちなみに、ある年の福島県内の生息地での表面水温は、2月 4.0℃、4月 16.0℃、6月 21.0℃、8月 28.0℃、10月 19.0℃、12月 9.0℃）

屋外飼育の場合、おおむね水温管理は必要ないが、夏季の直射日光による高温や冬季の結氷は、避けなければならない。

### 1-2 設置場所

屋内飼育の場合、上記の水温条件を満たす場所が望ましいが、急激な温度変化や著しい高温や低温になる場所は避ける。また、水槽の前を頻繁に人が行き交う場所などでは、魚が落ち着かなくなることがあるので避けた方が良い。そのような場所に設置する場合は、隠れ家を多く設置することや、水槽に目隠しを施す等の工夫が必要である。屋外飼育の場合も屋内飼育と同様であるが、鳥獣による捕食にも考慮が必要となる。

### 1-3 照明

屋内飼育での照明は、自然光や人工照明（蛍光灯、LED 灯等）のどちらでも良い。飼育だけならば、照明時間を気にすることは無いが、繁殖を行いたい場合は自然日長に合わせなければならない。

### 1-4 水槽容量

水槽の容量は魚の成長により、変更することが必要である。仔稚魚の場合、昆虫用プラケース（22×15×16cm 容量 50）の水槽で 50 個体ほど飼育できるが、成長にともない個体数を減らすか、容量の大きな水槽に移動する必要がある。小さな容量で過密に飼育すると、成長が悪くなる。未成魚や成魚は、90cm 水槽（90×45×45cm 容量 1800）ほどの水槽で、20 個体ほどで飼育することが望ましい。水槽容量はできるだけ大きくし、低密度で飼育することが良い。また、魚病や事故による損失を防ぐため、可能であるならば分散飼育する方が良い。

### 1-5 構造、設備

水槽の中には、何も入れずエアーストーンのみや簡易の投げ込み式濾過装置やスポンジフィルターでも飼育できる。この場合、糞や残餌の処理が簡単であるが魚自体が落ち着かないことも多い。仔稚魚の場合、餌料が吸われにくく掃除も簡単なため、むしろ底砂を入れずエアレーションのみの方が良い。未成魚や成魚の場合、前途の他に南国砂や珪砂を入れて、底面ろ過方式や外部ろ過装置を用いての飼育の方が魚自体、落ち着きやすい。さらに、水草や流木等で身を隠せる場所があった方が良い。



写真1 底面ろ過と投げ込み式ろ過の水槽



写真2 底掃除が簡単な稚魚用水槽

#### 1-6 飼育水

河川水や井戸水または、塩素を中和した水道水が良い。